

## II 学校行事における修学旅行の在り方

### —実施結果と反省・今後の問題点—

鈴木 孝

#### 1. 序論

今年度の修学旅行一研究旅行一は、数年来実施されてきた本校の修学旅行（大和旅行）とは、一転して新しいコース（京都・瀬戸内方面）をとったので、このコースが今後の修学旅行をどのような方向づけをするか、いろいろな問題点を残すことになった。この点を中心に戸報したいと思う。

#### 2. コース決定の過程

昭和46年12月上旬までに、高校修学旅行委員会（構成員 7名各一運営委員、学事部長、高1担任2名、国語・社会・理科各1名）から修学旅行の方針が教官会議に発表され、いろいろ討論された上、次の様に決定された。

- 1 性格を研究旅行とする。
- 2 方向を大和地方を中心とし、3泊4日とする。
- 3 時期は、高2の1学期、5月下旬とする。
- 4 高2新学期開始と同時に問題と取組ませ指導の徹底を図る。

12月中旬に、修学旅行についての説明会を各クラスでもつことになった。

##### 説明会の内容

- 1 学校の方針
- 2 従来のコース（3年間分）

昭和44年度

名古屋→高野山→多武峰→奈良→名古屋

昭和45年度

名古屋→多武峰→信貴山→奈良→名古屋

昭和46年度

名古屋→京都→奈良→多武峰→吉野→名古屋

- 3 二学期中に生徒の旅行委員を選出し、三学期からの取組み方

次に、あるクラスで修学旅行についてアンケートをとると、次の様な結果であった。

- 1 中学校の修学旅行（附属以外の生徒について）

- (1) 行先

関東地方 17名 奈良・万博 2名  
(附属出身者はすべて関東地方)

- (2) 楽しかったか。

はい 30名 いいえ 15名

##### 2 高校の修学旅行

(1) 附属高校の修学旅行についてどんな形式か知っているか。

はい 34名 いいえ 11名

(2) 修学旅行はやった方が良いか

(1) やるべし 34名 理由 楽しい思い出

普通の形式 20名

研究の形式 6名

その他 8名

(2) なくてもよい 8名 理由 ムダである。

(3) どちらでも 3名

(3) 附属高校の今の形で行なうか。

はい 8名 いいえ 37名

(4) 日数

4日 5名 5日 17名 6日 12名

7日 10名

(5) 目的地

北海道 20名 東北 5名 中部 2名

近畿 7名 中国 3名 四国 2名

九州 6名

12月下旬に選出され生徒側の旅行委員たちは、上のアンケートの内容からも理解されると思いますが、学校側が一方的に決めつけた旅行案に対しては不服であり、我々の意見も反映してほしいとのことを学校側につたえた結果、各ホーム・ルームで旅行案についての討論会をもつことになった。

生徒たちは、次のような理由

(1) 寺院・仏像などには、あまり興味をもっていない。

(2) 奈良・京都は、近いので行く機会に恵まれている。

(3) 中国・四国地方などは、遠くて行く機会がなくこんな時に行ってみたい。（未知の世界に対して青年の探険心をのぞかせている。）

(5) 規則的な学校生活から解放された楽しい思い出としての修学旅行にしたい。（規則的・習慣的生活から脱出し、精神的解放感を求めていた。）

で、学校側の旅行案には乗気ではなく、新しいコース（遠距離見学地）で行ないたいという結果となり、双

## 学校行事における修学旅行の在り方（Ⅱ）

方には大きな違いがみられた。

1月中旬の教官会議で、学年主任によって生徒の意向の報告がなされ、担任会では学校の方針との食違いをどのように修正するかが検討された結果、生徒に学校側の方針を納得させた上、生徒の旅行委員会に旅行案を提出させることにした。

各クラスで多数の案が考えられ最終的には次の4案にしばられ採決をとった。

A案 京都・北陸方面（12名）

名古屋→京都→園部→福知山（泊）  
福知山→舞鶴（泊）

舞鶴→敦賀→福井（泊）  
福井→名古屋

B案 大和・山陽方面

(i) 大和・東部山陽方面（8名）

名古屋→奈良→京都（泊）

京都→大阪→明石（泊）

明石→姫路→岡山（泊）

岡山→名古屋

(ii) 京都・瀬戸内方面（48名）

名古屋→（車泊）→大阪→神戸～～鳴門  
～～池ヶ谷～～高松（泊）

高松→琴平→丸亀→高松～～小豆島

（2泊）

小豆島～～岡山港→岡山→姫路  
名古屋

C案 山陽方面（27名）

名古屋→岡山→広島→宮島口～～  
宮島（泊）

宮島～～宮島口→広島→倉敷  
岡山（2泊）

岡山→姫路→名古屋

性格 研究と観光の組み合せ、

大きな違いは、コースの方向であり1月中旬から2月中旬まで担任と生徒の間で話し合いがおこなわれ、学校側と生徒側の折衷案という形で2月23日コースが次のように決められた。

第1日 名古屋→京都→岡山

第2日 岡山→鷺羽山→（水島工業地帯）→  
倉敷→尾道

第3日 尾道～～（因島）～～生口島（耕三寺）～  
～大三島～～大久野島

第4日 大久野島～～忠海→岡山→名古屋  
さっそく2月24日教官会議に提出され討議の結果旅行の性格を研究旅行である学校の方針を再確認して承認されることになった。

2月28日には、新旅行委員会（構成人員8名一運営委員、学事部長、高1・新高2担任各3名）が結成さ

れ、このコースについて話し合われ、京都以西については新しいコースであることから事前調査に2名派遣することが、その場できめられた。

3月6日の教官会議に事前調査の報告が、次のようになされた。

### 1. 海上旅行の安全について

(i) 船舶（チャーターボート）

船名	えんぜる	あまつかぜ	はやしお
策屯数	188t	94t	264t
航行区域	平水	平水	沿海
速度	11.7節	10.5節	13.5節
設備	リモート		船舶
	コントロール,		公衆電話,
	レーダー,		レーダー,
			冷暖房
収容定員	236	122	320
費用	17万	7万	19万

(ii) 安全

- 台風期、梅雨期（6月下旬）でなく海上静穏である。
- 船舶定員の余裕・救命具（ゴムボート、救命胴衣全員）

### 2. 見学地の研究価値（海上コースについて）

(i) 官泊地（三原）からの港と島々の眺望

(ii) 海上からの景観

因島の東海岸の風光、南岸の日立造船、瀬戸の潮流、

(iii) 三島の様子

生口島

西日光耕三寺（新門前町・諸仏寺建築様式）

向上寺（三重塔一国宝一と芸予の海）

大三島

大山積神社（無形文化財の一人相撲、武具展  
中心の宝物館と海事博物館）

離島対策（島を離れる高校卒90%人口減と島の将来）

大久野島

旧陸軍毒ガス製造の島

自然の風光、健全なレクリエーション

### 3. 見学コース・宿泊地の検討

(i) 宿泊地 尾道（環境、設備、安全の点から検討）

三原（全員収容でき分宿不要、環境設備、安全の点は良）

(ii) 見学地 尾道の見学とその時間、船舶の出発港とその時の移動方法（三原宿泊の時）

#### 4. 結 論

- (イ) チャーター船 えんぜるが望ましい。  
 (ロ) 宿泊地 三原が望ましい。  
 (ハ) コースの変更 2日目 尾道（バスを利用して見学）  
       3日目 宿から三原港まで徒歩—20分間—  
 この結論が承認され最終的なコースが決まった。

#### 3. 事 前 の 準 備

4月15日

新高2担任会で、京都研究グループの編成について話し合う。

ツーリストとの打合せ会

- (1) 計画書提示・旅行計画の説明  
     船舶の手配など（えんぜる→はやしお変更）  
 (2) 要望された事項  
     (i) 保健所への調査発送  
     (ii) 参加者人員の決定（31日まで）  
     (iii) 京都研究グレープの編成  
     (iv) 尾道の見学予定地

4月17日

担任会を開く、

- (1) 保護者への連絡を早めに、  
 (2) 生徒の旅行委員（各クラス2名）を決め、21日に委員会を開く。  
 (3) 京都・京都以西の研究テーマ（教官側が示すがこれにて制約はされない。）を、各1つ4月末までに決定させ、事前研究を5月17日までに終了させる。  
 (4) 尾道見学一千光寺、文学の小道、尾道城を中心

4月21日

生徒の旅行委員と連絡をもつ。

- (1) 委員の性格（企画から実施まで）  
 (2) 事前調査中に撮影し、4月上旬に編集された8枚映画を見せる。  
 (3) 京都・京都以西の研究グループのテーマと責任者を決め、5月17日までに事前研究の要約レポート、旅行後には完成された研究レポートを提出する。

4月24日

ツーリストより部屋割が送られた。

4月27日

参加者数の調査、集計を行ない 132名と決定  
 引率教官の決定一校長、旧高1担任、高2担任4名  
 養護一

4月28日

研究テーマ決定

#### 京 都

- (1) 西陣織の歴史建物と伽藍配置  
 (2) 伝統産業の研究—清水焼—  
 (3) 現代の寺院・城の姿  
 (4) 郷土の三大英傑と京都  
 (5) 右京区の庭園の研究と鑑賞  
 (6) 東山の建築めぐり  
 (7) 古代の人々の心  
 (8) 現代の古都—京都—  
 (9) 密教について  
 (10) 京都の言葉・京都人の意識構造  
 (11) 京都郊外の風土探望  
 (12) 京都の交通  
 (13) 京都の古墳研究  
 (14) 歴史探求  
 (15) 清水焼と京都の民芸品  
 (16) 京のこころ  
 (17) 古典文学に関連する無常所の研究  
 (18) 京都文学探求  
 (19) 西陣織・友禅染の研究  
 (20) 京都の庭園  
 (21) 京都の古典芸術—京人形—  
 (22) 西陣・友禅の町をたずなて  
 (23) 手作りの京菓子  
 (24) 京都の古店をたずなて  
 (25) 錦のにぎわいの研究  
 (25) 京都における料理の研究

#### 京都以西

- (1) 平家遺跡・平家物語遺路 (2) 方言研究  
 (3) 各地の地理的研究 (4)瀬戸内のスケッチ  
 (5) 瀬戸内諸島の生活様式 (6) 山陽道について  
 (7) 岡山以西の土産品 (8) 瀬戸内でとれる魚  
 (9) 山陽の古墳 (10) 駅弁のすべて

#### 岡 山

- (11) 地方史 (12) やきもの (13) 伝統工芸  
 (14) 風土 (15) 児島湾干拓 (16) 名物

#### 倉 敷

- (17) 商業の歴史 (18) 大原美術館 (19) 民芸館  
 (20) がんぐの研究 (21) 考古館・歴史館

#### 尾 道

- (22) 地方史 (23) 千光寺 (24) 文学 (25) 城  
 三 島

- (26) 島の観光と産業 (27) 島の住民の風土研究

- (28) 生口島・耕三寺— (29) 大三島の神社

- (30) 村上水軍 (31) 大久野島

- (32) 水島工業地帯の研究 (33) 紀行文

5月11日

教官旅行委員会を開き準備組織の分担、旅行中の生

## 学校行事における修学旅行の在り方（Ⅱ）

徒指導事項について話し合った。

5月15日

ツーリストから、映画（京都の川、京都の庭園、瀬戸内）がとどく。

5月16日

生徒全体との説明会をもち、ツーリストからおくれた映画、8ミリ映画を上映する。

旅行委員会を開く

(1) 部屋割について

(2) しおり作製の分担について

5月24日

ツーリストと最終的な打合せ会

5月29日

教官・生徒の合同委員会

(1) しおり作製の推進

(2) 心構え、諸注意の決定

(3) 京都の研究グループの活動表作製完了。

担任会

(1) 大久野島の様子（毒ガスが発見されたことが新聞で報道されたため）を検討

(2) 京都における教官の活動分担

5月31日

保護者へ第3日目の行程が、危険と思われる場合の代案と大久野島の現地の状況をおりこんだ最終報告書を配布した。

6月1日

しおり作製完了。

## 4. 事後の指導

### 4-1 研究テーマについて

事前調査の要約（京都 13ページ、京都以西 26ページ）は、しおりで全員に配布された。又旅行中（6月2日～6月5日）は各宿泊地で、現地で得た知識などを総合した発表会が、3時間余り毎日つづけられた。

そして担任が、そのまとめを旅行後一週間以内に提出することを生徒にいいわたした。

その結果、京都に対しては強制的な提出であったため、89ページにおよぶ素晴らしい発表がなされたが、京都以西については、自由であったためか、提出数が少ないというありさまで、少し残念であつた。

ここに 京都の研究テーマの要約とまとめの一例をとりあげる。

### 〈要 約〉

#### 古典文学に関連する無常所の研究

嵯峨野を中心に、仏野念佛寺い双丘山兼行院長泉寺落柿舎等、諸墓地を訪ね、私たちの慣れ親しんできた古典にみられる「世の定めなきこそいみじけれ」とい

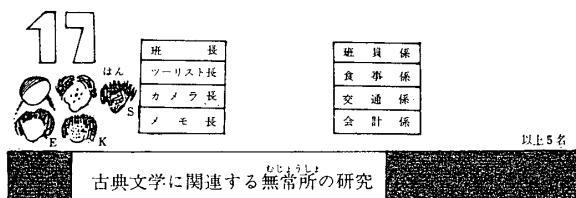
う無常觀を身をもって体験し、味わいたいと思う。

仏野念佛寺は、待然草第七段の「あだし野の露」で鳥部山の烟と共に知られているように、昔は死骸をすてて風葬にしていた場所で、数千体の無縁仏がほうむられている。その莫大な数の石仏の中、無常所の中では、常住すら感じられるかも知れない。

又、長泉寺には本当の墓所かどうかはさだかではないが、兼好の墓があり「ちぎりおく花とならびの岡の辺にあはれいく世の春をすぎさん」と彫った兼好の和歌もみられる。

時代はずっと新しくなるが、落柿舎には、蕉門十哲の一人、向井来の墓がある。彼はある出来事によって胸に刻みつけられた無常感から俳人を志した人である。

こうした墓や、興味ある寺院を通して、色々な角度から掘り下げ、吟味して無常思想の根底に流れるものを見きわめ、それを浮き彫りにしていきたいと思う。



### (前書き)

我ら5人の研究の一番本質的にたいせつな問題というのは、要するに無常感、言ってしまえばフィーリングの問題に関する、研究である。ここで言っておきたいことは、我々は、あくまでも個人々々のもった感じを尊重したいということだ。であるから、ここにまとめる研究は、色々な資料をただ写すものには、したくない。我々が行った3つの無常所は、それそれかなり深い、興味がある歴史がある。それもできるだけ書きたいと思うのだが、それらは少し簡単にわかりやすくおさえる程度にして我々5人の自由な気持をできるだけ自由なままにまとめたいと思う。

### (コース)

京都駅—(化野念佛寺)—(落柿舎)—(長泉寺)—  
—京都駅

#### 化野念佛寺

概説 小倉山の北麓に位置し、古来から一般庶民が無常の葬いを送る野辺であった。昔は死骸をすてて風葬にしていた場所で後、弘法大師により、土葬の地となり、人々が石仏を刻み 数千体の無縁仏



(死者をとむらう縁者がない) がほうむられている。「化」の字は「生」が化して「死」となる事を意図し遠い昔から墓地である。あだし野にふきわしい文字として約300年前より使用されている。他には仇野、阿陀志野とも記す。中に西院の河原、仏舎利塔、釈迦陀二尊の石仏、みづ子地蔵、虫塚などがある。ここでは、それらの説明は省略する。

—感想・その他—

**想**

像していたジメジメとした感じの苔むしたような寺とは、かなり違っていて、驚きもしいささかがっかりともしたが、その石仏群に圧倒されたことに変わりはなかった。又、みづ子地蔵尊が感動的であった

(A)

**山**

深くの人かけも少ない、うす暗くてしめっぽいなかにしんとだまりこくった無数の石仏を私は想像していた。私の生活にはないそのしづけきを私は期待していた。無常感をうっすらとでもすなおに感じることができたらと思っていた。実際の念佛寺は、そうたいして山深くでもなく、わりと人も多く、うす暗いどころか、太陽がぎらぎら照りつけていた。しかし、期待どうりにいかなかったとはいえ、私が無数にならぶ石仏の群を見て、ふつうのお墓やふつうのお寺とは、何かちがうものを感じたのは、その石仏がみな無縁仏であったせんだろうか。変だと笑われるかもしれないが、私はその時、あっちを向いたり、こっちを向いたりしているその無数にならぶ石仏たちが、なぜか私を見ているような気がしてならなかった。そして、何か沈黙のうちに今の私を批判しているようにも感じた。しかし私は、正直にいってその時、無常を感じとったとまではいかなかった。

(S)

**石**

仏群や木かけの虫塚などが、静かな場所にいっそう静けさをさそっているようだった。またみづ子像にたいへん心をうたれた。もう少し暗い感じの所だと思っていたが、日中だったためかもしだれないが、想像していたよりも明るい感じだった。でも夜独りで「ここに来い」と言われても、ちょっと恐しくて行けない感じ。

(K)

**力**

シカン照りの下で見物人もかなり多く、静かに無常感を味わうというわけにはいかなかった。しかし、いろいろ見て回っているうちに我々5人は、みづ子地蔵(この世の光をみづに露と消えた子の靈を供養する地蔵)を見つけ、人工流産などによって、ほんの一瞬にしか、この世に存在しなかった者の地蔵を見て、我々一同、何かを強く感じとったと思う。(I)

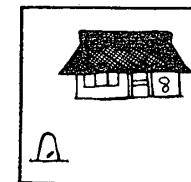
**人**

工的な石段を登っていく時、今までのイメージが全くこわれてしまった。拝観料60円を払ってから石仏群を見た時あつと思った。それは、石を積み重ねた質素な墓が数百個おかれていたからだ。名前もかかれていなかった墓に自分の心をのぞかれる思いがした。念佛寺の奥には竹林があって、その静けさがいかにも念佛寺らしかった。

(E)

**落柿舎**

—概説—



ここは蕉門十哲の中で最も師の

信頼のあつかった向井去來が嵯峨の別荘としていた草庵(草で作ったそまつな家)であった。松尾芭蕉が嵯峨日記に書いた落柿舎は現在のそれではなく、或いは、大嵯峨川端村だったともいわれている。

落柿舎という名のいわれは、「去來が庭の柿の実を八百屋に売る約束をしたまではよかったです、一夜の嵐ですっかり落ちてしまってベソをかいた」というおもしろい話からであるそうだ。落柿舎の北方100メートルの弘源寺墓地に去來の墓がある。昭和7年発行の『嵯峨誌』によるとこの墓は去來亡きあと遺髪を埋葬したもので、今日では去來の唯一の墓になっているのだという。(我々はこの去來の墓を主に研究した)

—感想・その他—

**こ**

こはあまり感じることがなかったが、去來の墓を見ていた時ヤブ蚊にさされて、たいへんかゆかった。

(K)

**色**

々な文献によると、とてもすばらしいところあり、非常に期待していたのだが期待はずれともいいことだ。割に狭くてあまりパッとせず、ああそうかいなアという他持ちえなかった。去來の墓は、あの文字が非常にすばらしくいいのだろうが、残念ながらそれに足るだけの鑑賞眼を持ちあわせていなかった。

(A)

**去**

來の墓はいかにも土の中からひょっこり岩がはえてきたように、自然なかんじのする墓だった。その石にはただ去來とだけ、それも自然に書いてあった。うっかりすれば見落とすような小さな墓だけに、見つけた時はひとしおうれしかった。——おのれの死後を飾ることに苦しむ阿呆の多い世の中に何とこの小さな墓が大きく見えることか——これは落柿舎でもらったしおりの中に、尾崎士郎という人が述べていることであるが、私の気持もこの一文につきる。まさに去來の墓は偉大だった。私に無常を感じさせない強さが

あったように思う。

(S)

**そ**の去来の墓というのは、草むらの中の低い竹垣をめぐらされていた、そして、尾崎士郎氏の語っているようにそれは「チンポコのような石のかけら」であった。そして墓石には、ただ去来と書いてあるだけ。【周辺もしんみりと落着いたムードほんの少しの間、私は無常の「無」の字くらいは味わえたような気がすを。

(I)

**自**然の中にうもれるように去来の墓があった。去来と記されたその字に、去来の人格がうかがえるよう思う。落柿舎は、去来の墓より1、2分のところにあったが去来の墓が草の中にあったのに対して、落柿舎の庭はゴミ草1本もみられないで何も感じる所がなかった。ただ現在の庵住さんはきれい好きな人だと思ったくらいである。

(E)

**長泉寺**——概説——恐らく長泉寺の建立によって兼好の墓石も長泉寺の方に移されたものであろう。現在の兼好の墓石がその当時のものかどうかは明らかでない。

感想・その他

**京**福電車で御室で下車し、ある下町の通りを下って行くと、何でもない小さな木戸の入口の尼寺がある、それが長泉寺だった。入りにくい木戸を押し開けて、玄関を呼ぶと中から品の良いおばあさんがでてきた。兼好法師の像を拝ませもらって、いろいろ話を聞いて庭の墓に案内された。品の良いおばあさんにすっかり緊張しながらも、私は「無常観」というよりは、むしろ「風流さ」「素朴さ」をしんみりと感じたものだった。しかし、なぜあれほど兼好法師の墓が、あのような何でもないさびれた尼寺の中にあるのだろうか？、ひとつ私は、兼好の墓の前で蚊に3ヶ所もかみつかれたのだった。

(I)

**少**し疲れを感じて、御室の駅を降り八百屋のおねえちゃんに聞きながら長泉寺にたどりついた。小さな門をあけると、『あけたらしめる』と書いてあった、いかにも人間が住んでいたらしかった。ここは前のふたつとは、どこか違うように思った。ここで「無常観」を感じたような気がして、言葉も自然に少なくなった。それはきっと兼好の墓からではなく、長泉寺のおばあさんにふれたからではないだろうか。

(E)

**こ**こが京都の研究の中でいちばんミのある研究が出来たのではないかと自負しているところである。

ここでは京都人のあたたかさ、まろやかさに、もうにふれることが出来、非常に感激した。兼好の墓かどうかは定かではないという話だが、仏壇には兼好法師の像がありバッタリ、カメラにおさめることができた。これもすべて親切な住職の奥さんのおかげである。この度のレポートには写真をそえることが出来ないという話で、憤まんやる方ない思いである。

(A)

**長**泉寺はふつうの民家のように、えもすると通り過ぎてしまうような小さな寺だったが、そこに住んでいるおばあさんが親切に吉田兼好の像がある座敷に通してくれて、写真も写させてくれた。何年ぶりかにこんな親切を味わったので涙が出るほど感激した

**お**寺の中に勉強机があったのが印象的だった。

(S)

(まとめ)

無常 というもの

今までのこの研究をあらためて読みかえしてみると、やっぱり無常を感じるには、あまりにあわただすぎたようだ。しかし、はたして今の我々は死ということを真剣に考えて、そして理解して生きているのだろうか。我々は今度の旅で無常というものについて考えなくてはならない、理解しなくてはならない。そしてそれを考えることは生きているものにとって、最も大切なことであると思うようになった。しかし、医学がすばらしく発達した現在、何もかもあわただしくなってきた現在、我々はしだいに無常を感じるひま、余裕、みたいなものは失いつつあるのではないだろうか。我々は思うのだが今日去来や兼好のように無常を、ほんとうに真剣になって感じている人たちがはたしているだろうか。そして人間は無常を感じずに生きるようになったら、どうなるのだろうか、そんな難問をこれから聞いていくのが、これから我々の大きな課題である。最後に、我々5人の死、あるいは無常といいうものに対する現在もっている考え方を書こうと思う。

死ということはおそろしいなどと思はない、わたしは死んだら塊がどうなるか、なんて考えは持ったことがない。ただ何もかもなくなってしまうと信じて疑わない。ふと、このまま自分というものがなくなってしまったらと思うと、何とも不思議な気持になって来る。人間は死によって本当に終わってしまうもので、それほどはかないものだと思う。

(E)

人間は一度死ぬ。一度しか死がない。死ぬとは私はどうなるのだろう。死んだ私はどんなだろう。死とは

何と不思議なものだろう。

(I)

死とは永遠の眠りにつくこと。苦しいことや、わざらわしい人間関係など、いっさい考えなくてもよくなること。そのかわりに、喜びや、楽しさなども、味わえなくなること。とにかくすべてのものや事柄が無の状態で、ここからはぜったい脱出できない世界に、たった独りで入って行かなければならぬ過程である。

(K)

#### 死と無常の関係の定義

死と無常の関係について考えてみると、死というものは無常の最終的な形だといえよう。死は決して無常とイコールではないが、かといって全く違うものだとも言いきれない。つまり、死の最終地である墓地を無常所という以上、死と無常とは何らかの形で接すると考えられる。だから墓地においては常住も無常も感じることができるのである。

(A)

死ぬということは、私にとって一番こわい、わからないものだ、いつか私も死ぬと思うと、とても気もちがおちつかなくなってしまう。私はもっと死ということを理解したい。

(S)

## 4-2 反省会について

旅行後、L・Tを利用して各クラスで反省会を開き討論をした結果、次のような反省事項があきらかになった。

### (1) 京都

- 時間を長くすべき、  
(研究するのに必要な所にも行けない。)
- 京都での研究はやめにすべき、  
(時間がかかりすぎ十分な研究ができないので、その分を他にまわした方がよい。)
- 先生同伴でなかつたのが良い。
- 集合時の時間を短縮すべき。  
(駅で30分も待つのは不合理)
- もっと小さな単位のグループにすべき、  
(3人以上のグループでなければだめだった。)
- テーマが重なつのが良くない。
- 下調べをもっとすべき、(交通機関など。)

### (2) 岡山

- 外出禁止はきびしい。(研究ができない。)
- 京都の時のように班ごとに重点的な研究をすべき。(バス旅行はくだらん。)
- 個人テーマ外だと観光旅行になる。

### (3) 倉敷・尾道

- 下調べの不足。
- 見学するものが多いわりに、時間が足りない。  
(倉敷)
- 歩くだけではだらない。(尾道一千光寺。)

- 水島工業地帯の見学がしたかった。
- 入場料の集め方を考えるべき。  
(現地で集めたための混雑。)

### (4) 大三島・生口島・大久野島

- 時間が余分で行くに値しない耕三寺。
- 大三島での時間が短かい。  
(見るべき所が多い。)
- 校長先生のお話は、大変良かったが聞く態度が悪い。授業とはわけが違うんだぞ。(大三島)
- 因島は、素通りで残念
- 大久野島は、大変楽しかった。  
(時間と適當な遊び道具、最後の日をすごすには良い。)

### (5) 全体

#### しおり

- 配布が遅れた。
- 実用的でない。(厚すぎて不便)

#### 旅行

- もっと時間的、精神的に余裕をもたせる。
- 乗り物の待ち時間をとりすぎだ。
- 研究旅行の名にふさわしいのは、京都での1日だけ、2、3、4日目は個人の行動しだいで観光旅行になる。

#### —個人の旅行に対する考え方をしっかりとさせること—

- 夜のミーティングの内容を充実。  
(京都重視は良くない、聞く態度が悪い。)
- クラス単位の行動が多すぎた。
- 旅館での外出を可能に。
- 事前の計画をしっかりと。  
(無駄に歩き回るだけになる。)
- 旅行委員と生徒とのつながり、報告があいまい。
- 研究内容の決定が行程決定後であったため、研究内容にあった行動がとれなかった。
- 消灯時間を考えて。  
(10時に寝れるわけがない。)
- 見学よりあとのまとめが肝心。
- 目的地をしほる必要。  
(1ヶ所とどまる重点的研究を。)
- 中間テストからの時間が短かすぎた。
- 旅行自体をもっと考えるべき。
- みんなはめのはずし方になつてない。／ということを言いたい。楽しい旅行だからはめをはずすのもいいがそのはめのはずし方をまちがえた人が多々あったような気がしてならない。あくまでも最低のルールを守ってはめをはずして欲しいもんだ。

## 学校行事における修学旅行の在り方（Ⅱ）

- 研究は、グループで自由にやるのが一番効果がある。（早くグループを決める。）バスでの見学は最低。

### 5. 結論

研究旅行といえるのは、今回のコースの中で初日（京都）だけのようであり、その他の3日間は乗物を中心の観光旅行の面が、多くあらわれたようである。やはり、じっくりと研究するには、従来の大和旅行のように、1カ所に腰を落着け調べ上げるのが肝心ではないだろうか。

しかし、今回のようなコースを次年度に受継ぐことになれば、乗物の時間的制約が大きな要素になるので、見学地を精選（例一生徒の移動回数を1日1回ぐらいがよく、朝に移動をすませ、夕方宿に集合するという方法など）し、比較的時間の余裕のあるコースを決定することが望まれる。

生徒の啓蒙という点では、入学早々ぐらいから長時間をかけて、研究旅行への関心を高めさせ、研究旅行

はどんなものであるか（今まで一般的に言われている修学旅行とは、異なっていることを強く打ち出した形で）を考えさせる時間をあたえ、さらに1年生の旅行に対する考え方を深めるためにも、2年生の旅行後時期を見つけて1・2年の合同集合を開いて、どんな点を改善していったらいいか話し合うことが望ましい。

時期については、日が長く、気候も穏やかで自然に恵まれている。しかし生徒指導上において、高2になってわずか1カ月半ばかりで、生徒を把握することが困難であるという問題点があり、新2年生の担任は、持ち上り制か、少なくとも1名は担任として残ることが良い。

おわりにあたり、資料を提供してくださいました加藤佳孝氏、織田長繁氏に感謝いたします。

#### 参考資料

名大教育附中高紀要第17集

学校行事における修学旅行の在り方

鈴木洋一郎